

小谷みどりさんの
コラムで「手元供養」が、紹介されました。

「死んだら墓に入るのが当たり前」ではなくなつた。「暗いお墓に入れるのはかわいそう」「そばに置いておきたい」など、自宅に遺骨を安置する遺族は多い。人目に触れても違和感のない骨壺も登場している。

「自然に還りたい」「思い出の場所で眠りたい」と散骨を選ぶ人もいる。韓流ドラマや数年前に話題となつた「世界の中心で、愛をさけぶ」などで、散骨がロマンチックに描かれたことも影響してい

やすらかに…。 葬のかたちは今

— ⑤ —

り組む地域もある。

欧米では、散骨が可能な区画が墓地に設置され

ているか、「海洋沖で撒くこと」などのルールが

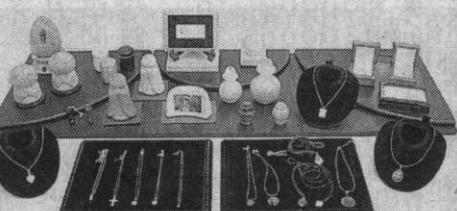
定められている。死者と生者がうまく共存できる

環境が、整備されている

のだ。

「お墓はあるが遠くて墓参りに行けない」と

「手元供養」に関心を持



さまざまな手元供養用品(筆者撮影)

散骨や手元供養も増加

いるのが現状だ。とはいっても多くの遺骨をペンダントや人工ダイヤ、ブレードなどに加工するタイプと、細かくした遺骨を小さな容器などに入れられるタイプがある。

子ども全員で親の遺骨を持つておきたいと、ペ

る。葬のかたちが変容しても大切な人を偲びたいといふ気持ちは不変だし、それが、遺された人の生きる原動力にもなる。形式にこだわりすぎる必要はないのではないかと思う。(第一生命経済研究所主任研究員・小谷みどり)

人を偲ぶよりどころになつているようだ。

こうしたニーズに対応すべく都内の火葬場「戸田斎場」は四年前から

粉骨サービスを始めた。

遺骨の量が四分の一にな

るので、自宅安置や散骨

だけでなく、小さなお墓

でも複数の遺骨を納骨す

ることも可能だ。

葬のかたちが変容して

いう気持ちは不变だし、

それが、遺された人の生

きの原動力にもなる。

形式にこだわりすぎる必要

はないのではないかと思

う。(第一生命経済研究

所主任研究員・小谷みど

り)

||おわり||